

# オウム真理教の捉え方

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00000022">https://doi.org/10.24517/00000022</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 研究ノート：オウム真理教の捉え方

島 岩

## 0.1 1. はじめに

オウム真理教事件発生以来はやいもので、もう6年が過ぎた。あらゆる事件が、ワイドショーによって、奥行きもなく平板に消費されていってしまう現代において、このオウム真理教事件もまた、すでに消費され尽くして情報の洪水の中に埋もれ、風化しつつあるかのようである。だがこの事件は、「全共闘世代」にとっての全共闘運動と連合赤軍事件のように、「オウム世代」にとって、理想として求めたものが、何故かいつのまにか、ある意味では必然的に、悲惨な結末へと反転してしまうというパラドックスとして、今後も深い傷跡を残し続けることであろう。そしてこのパラドックスは、ひょっとしたら、カンボジアのポルポト政権下での「改革」や、中国の文化大革命や、西アジアや南アジアにおける宗教原理主義的運動や、先進諸国におけるカルト運動などの、反近代主義的な改革運動がすべて、抱え込んでしまっているパラドックスなのかもしれないのである。

さてでは、オウム真理教の信者たちが求めた理想とはどのようなものだったのだろうか。もろろんそれは、超能力の獲得や癒し・安らぎから解脱まで、人によってさまざまなのだが、オウム真理教の最大の魅力の一つに、次のような神秘体験の獲得があったという点については、異論のないところであろう。

尊師がいらっしやった。「今日必ず解脱するぞ。」とおっしやった。そして、最後のイニシエーションを与えてくださった。強烈なエネルギーだ。頭に気が集まっている。修行を開始する。快感が走る。震動する。しびれる。そして、太陽の光のようにまぶしく、ものすごく強い、明るい黄金色の光が頭上から眼前にかけて昇った。金色の光が、雨のように降り注いでいる。その光の中で、わたしは至福感に浸っていた。この太陽は、その後何回も昇り、そして最後に黄金色の渦が下降し、わたしの身体を取り巻いた。このとき、わたしは光の中に存在していた。いや、真実のわたしは光そのものだったのだ。その空間の中に、ただ一人わたしはいた。ただ一人だが、すべてを含んでいた。真の幸福、真の自由はわたしの中にあることを悟った。そのとき、わたしは光だった。(麻原彰晃『ザ・超能力秘密の開発法』オウム出版、1995年2月、pp. 306-307。)

これは石井久子が自ら記している瞑想中の体験である。この体験の記述全体にただよっ

ている甘ったるい香りには違和感を覚えはするものの、率直に言ってこの体験は、少なくとも私にとっては、とても魅力的なものに思える。というのは、大学生のころ、私は、時空を超えて永遠そのものとなりたいたいという満たされぬ欲求に苦しめられており、その時期にもしこの記述に出会っていたら、オウム真理教が一般に公開していた「瞑想ヨーガセミナー」には少なくとも参加していただろう、というのは確実だからであり、またもし、その後オウム真理教の中で、ここに記されているような神秘体験をしてしまったら、後にオウム真理教を脱会するにせよ、その中に留まるによせ、いずれにしても、その中ですでにしてしまったこの種の「私の神秘体験」自体を否定することは、その当時の私にはとてもできないことだっただろうと、確信をもって言えてしまうところがあるからである。なぜなら、その当時の私にとっては、すでにしてしまった「私の神秘体験」を否定することは、その神秘体験によって変容した現在の「意味ある私の存在」自体を否定して、再び、「無意味な私」と「無意味な私の生」へと戻っていかねばならないということ、意味することになっていたはずだからある。その意味で、オウムをアレフと改称した際にも依然として、麻原を「ヨーガと仏教的瞑想の天才」として崇拜しつづけているオウム信者たちの気持ちの半分（つまり麻原を崇拜するという部分ではなくて、麻原によってもたらされた神秘体験をしてしまった私は否定しきれないという部分）と、脱会信者たちが口をそろえて「オウム真理教に入信したことは後悔していないし、そこで過ごした時間が無駄だったとは思わない」と答える気持ちのほぼ全体が、私にはそれなりの共感をもって理解できるような気がするのである。

だが、にもかかわらず、もう一方では、現代において、「私の生の意味やリアリティー」の根拠を、この種の神秘体験に求めるというあり方のなかには、落とし穴や危険性（あるいは悲惨な結果へと必然的に導いていく仕組み）が仕込まれているというのも、オウム真理教やその他のカルトが辿り着いた悲惨な結末から見て、確かなことであるように思えるのである。従って、私の最終的な関心は、どのような仕組みでそうになってしまうのか、また、どうすればそのようなパラドックスに陥らずにすむのかという点にあるのだが、本研究ノートではまず、そのための前段階として、オウム真理教事件以降、オウム真理教あるいはオウム真理教事件がどのようにとらえられてきたのかという点について整理しておきたいと考えている。ただしその際に取り上げるのは、基本的には単行本だけである。というのは、一方では、事件直後にジャーナリズムに発表にされた数多く雑誌論文はあまりにも玉石混淆だからであり、また他方では、単行本だけでもこれまでの論点を整理するのに十分な数のものがすでに出版されているからである（なお、単行本とは言っても、司法関係のものは、上記のような私の関心とはずれるので割愛することとする）。

## 0.2 2. これまでの発言と研究（1） テーマ別分類

現時点で Nacsis Webcat で「オウム真理教」というキーワードで図書検索を行うと、約 200 冊の図書がリストアップされるが、そのうちの約半分はオウム真理教が出版したもので、残りの約半分がオウム真理教あるいはオウム真理教事件に関する図書（特集雑誌も含

む)である。そして、このここ6年間に出版された約100冊のオウム真理教あるいはオウム真理教事件に関する図書のうち、その大半は1995-97年の三年間の間に出版されたものである。このことは、マスコミおよび出版界が、いかにすばやく、オウム真理教に群がりそして去っていったかということ、実によく示しているものと言えるだろう。そしてそのなかで当時話題となっていたのが、次のような三つの疑問であった。

1. なぜ、知的に優秀な若者たちが、麻原彰晃という山師的宗教家が作り上げたオウム真理教などに惹かれて、サリン事件を引き起こしてしまったのか。
2. 宗教とは本来は良きものであるはずなのに、なぜ宗教団体が、あのような殺戮を行ったのか。
3. なぜ、平和でそれなりに安定しているはずの今の日本社会に、このような暴力的な教団が成立してしまったのか。

### 0.2.1 2.1. 謀略説

いずれも、即座には答えのにくい疑問ばかりである。そこで、そのような分かりにくさを一挙に解決する説として提示されたのが、「闇の組織」が暗躍する謀略説である。この説はその後、オウム真理教の組織のずさんな実体が明らかになっていくにつれ影を潜めていくことにはなるが、現在でも依然としてくすぶっているものである。その例としてはたとえば次のようなものがある。

1. 池田昌昭『オウム真理教とサリン事件の本質』金沢印刷、1995年。
2. 一橋文哉『オウム帝国の正体』新潮社、2000年。

このうち前者はCIA陰謀説の立場から書かれている。一方、後者は、オウム事件の背後には、日本の政財界、警察上部と癒着した暴力団、ロシアや北朝鮮の工作員、統一協会等の宗教団体、マフィヤなどがうごめいていたととらえている。

### 0.2.2 2.2. ジャーナリズム側からのルポルタージュとオウム特集

このような謀略説の真偽のほどは、謀略であるだけあって結局のところは分からないということになるのだが、それよりはもっと地道なジャーナリズムからの対応として、ルポルタージュとオウム特集雑誌がまず提示された。

#### 2.2.1. ルポルタージュ

そのうちまずルポルタージュには次のようなものが挙げられる。

1. 藤田庄市『オウム真理教事件』(Asahi news shop 22)朝日新聞社、1995年5月。

2. 江川紹子『「オウム真理教」追跡 2200 日』文藝春秋、1995 年 7 月。(Cf. 江川紹子『救世主の野望 オウム真理教を追って』教育史料出版会、1991 年。)
3. 熊本日日新聞社編『オウム真理教とムラの論理』朝日文庫、1995 年 8 月。
4. 毎日新聞社会部編著『冥い祈り 麻原彰晃と使徒たち』毎日新聞社、1995 年 10 月。
5. 毎日新聞社会部『オウム事件取材全行動』毎日新聞社、1995 年 10 月。

これらはすべて、オウム真理教とは何か、麻原彰晃およびオウム真理教の幹部たちはどのような人物か、また、オウム真理教が各地で、地域社会との対立を引き起こしながら、実際にどのようなことをやってきたのかを、具体的にルポルタージュしたもので、その具体性故に、貴重な資料となっている。ただしまだ、この時点では、オウム真理教やオウム真理教事件に関する分析は十分ではなく、また信者たちの内面についても見えてこないというところが認められる。

### 2.2.2. オウム特集雑誌

そのような状況のなかで、オウム真理教およびオウム真理教事件に関する分析が、さまざまな論者によってさまざまな視角から行われたのが、以下のようなオウム特集雑誌においてであった。

1. 『オウムという悪夢』(別冊宝島 229) 1995 年 8 月。
2. 中沢新一責任編集『オウム真理教の深層』(Imago 第 6 巻第 9 号) 青土社、1995 年 8 月。
3. 朝日新聞社編『何がオウムを生み出したのか 17 の論考』(Asahi news shop 29) 朝日新聞社、1995 年 8 月。
4. 『オウム真理教事件 宗教者・科学者・哲学者からの発言』(仏教別冊 8) 法蔵館、1996 年 1 月。

このうち 1 は、オウムの現役信者や脱会信者へのインタビューをもとに、彼らがどのような人たちで、どんな考えを持っているのかをいち早く紹介した点が評価できる。だが、オウム真理教の分析には未消化なものが多く、あまり見るべきものはない。ただそのなかでも、オウムを世界的広がりを示しているカルトの中にいち早く位置づけてとらえた越智道雄「オウム真理教と人民寺院」と、後にふれる『終わりなき日常を生きる オウム完全克服マニュアル』とへつながっていった宮台真司「オウム完全克服マニュアル『良心』の犯罪者」は評価にあたいするだろう。

次にこれら四冊のなかでもっとも力作が多いのが 2 である。なかでも特に、永沢哲「わが隣人麻原彰晃」と中沢新一「尊師のニヒリズム」は、観点は異なるが、クンダリーニ・ヨーガを軸に、宗教としてのオウムをとらえた興味深い論考である。

次に3は雑誌ではないが、特集雑誌と類似の形で、識者による16の分析と学芸部の「オウム真理教と今」の計17の論考を収めたものである。識者の分析や発言よりも、学芸部の「オウム真理教と今」のほうが、オウム真理教問題を簡潔にうまくまとめていて興味深い。

最後に4は、全体的には玉石混淆だが、宮坂宥勝「オウム真理教とは何か 教理の実体について」(オウムを仏教とヒンドゥー教の奇妙な混合体としてとらえる)、川村邦光「宗教の闇をめぐって ヴァジラヤーナへの道程」(生のリアリティーとの関わりからオウムをとらえる)、鬼頭秀一「宗教と科学技術とのねじれた関係」(ディープ・エコロジーやニューサイエンスが持つ問題点である、制度としての科学への無自覚さとの関わりから、オウムにおける科学との関わりをとらえる)、後にふれる単行本『宗教なき時代を生きるために』へとつながっていった森岡正博「宗教なき時代を生きるために」が、私の関心との関わりでは興味深い論考である。

### 2.2.3. 宗教学からの分析

一方、特定の学問分野から、いち早くオウム真理教の分析を行ったのは、これまで日本の新宗教の研究をその主要な課題としていた宗教学であった。サリン事件以降すぐの1995年段階でのその成果が以下の二冊である。

1. 井上順孝 [ほか] 編著『オウム真理教とは何か 現代社会に問いかけるもの』(Asahi news shop 21) 朝日新聞社、1995年5月。
2. 島園進『オウム真理教の軌跡』(岩波ブックレット 379) 岩波書店、1995年7月。

このうち前者は、Q & Aの形式で、テーマ別にオウム真理教に関する疑問に答えたものであり、後者は、オウム真理教の思想的な軌跡を追い、その思想をシンクレティズムや生き神信仰等を特徴とする日本宗教史の中に位置づけようとしたものである。両書がそれぞれ、項目別アプローチと歴史的アプローチとを相互に分担しあって補完しあうという形になっており、二つあわせてきわめてタイムリーな書だと言えるだろう。

### 0.2.3 2.3. オウム脱会信者の手記あるいは信者へのルポルタージュ

以上見てきたことから分かるように、1995年3月20日の地下鉄サリン事件以降、ほぼその年のうちに、オウム真理教の実体がさまざまな形で報告され、オウム真理教とオウム真理教事件に関するとりあえずの分析が、ジャーナリズムを中心として行われていたのであった。だが、信者の内面に関しては、この時点ではまだ、以下に挙げる手記のなかの二冊に断片的な信者の内面の記述が記されていたにすぎなかったということもあって、なぜ彼らがオウム真理教に惹かれたのかいまいち分からないという状態が続いた。だがそれも、以下のような手記やルポルタージュが次々と出版されたことで、徐々に明らかになっていくことになるのである。

[手記]

1. 滝本太郎・永岡辰哉編著『マインド・コントロールから逃れて オウム真理教脱会者たちの体験』恒友出版、1995年7月。
2. オウム真理教信徒救済ネットワーク編著『マインドコントロールからの解放』三一書房、1995年12月。
3. 高橋英利『オウムからの帰還』草思社、1996年3月。
4. 田村智・小松賢寿『麻原おっさん地獄』朝日新聞社、1996年4月。
5. 林郁夫『オウムと私』文藝春秋、1998年9月。
6. 早坂武礼『オウムはなぜ暴走したか 内側からみた光と闇の2200日』ぶんか社、1998年10月。
7. 宮内勝典・高橋英利『日本社会がオウムを生んだ』河出書房新社、1999年3月。
8. カナリヤの会編『オウムをやめた私たち』岩波書店、2000年5月。

#### [ルポルタージュ]

1. 大泉実成『麻原彰晃を信じる人びと』洋泉社、1996年1月。
2. 瀬口晴義『検証・オウム真理教事件 オウムと決別した元信者たちの告白』社会批評社、1998年3月。
3. 村上春樹『約束された場所で Underground 2』文藝春秋、1998年11月。

これらの本を通読すると、信者たちがほぼ共通して、人生の虚しさを感じ（ルポ3）自己の存在の無意味さに耐えられずに（手記3）、超能力や神秘体験（クンダリーナ・ヨーガ体験）や悟り・解脱に惹かれて（手記1, 4, 5, 6, 8, 9）オウムに入信し、そのような関心を共有しながら本音で語り合えるオウムのサークル的雰囲気心地よかった（手記1, 9）と語っていることが分かる。つまり、超能力への関心を除けば、その動機は、私が大学生だったころとなんら変わっていないのである。

なお、このうち手記は、そのほとんどが脱会信者によるもので、いまだにオウム真理教内部に留まっている人たちの声はなかなか聞こえてこないという偏りが認められる（それは仕方のないことなのだが）が、その限られた声も聞けるという意味では、ルポルタージュは貴重なものである。

#### 0.2.4 2.4. 戦後50年とオウム真理教

ここまででは、「オウム真理教事件とは何か」という問と「オウム真理教とは何か」という問とを区別することなく、オウム真理教あるいはオウム真理教事件に関する図書の紹介

を行ってきたが、実際には、この二つの間にはズレがある。「オウム真理教事件とは何か」という問を前面に出すと、その分析はどちらかといえば、オウム真理教あるいはオウム真理教事件を生み出した現代社会を捉え直そうという方向をとることになる。一方、「オウム真理教とは何か」という問を前面に出すと、その分析はどちらかといえば、オウム真理教あるいはオウム真理教事件を宗教的次元から捉え直そうという方向をとることになる。そして、この二つの差が比較的良好に現れているのが、以下の二つの対論集である。

1. 呉智英[ほか]著『オウムと近代国家 市民はオウムを許容するか』南風社、1996年。
2. 室生忠[ほか]著『対論オウム真理教考』三一書房、1996年。

すなわち1は、オウム真理教事件を近代国家と近代理念(すなわち人権思想と民主主義という理念)の限界あるいは弱点をついた重大事件ととしてとらえ、一方、2は、前者と同じような視点をもいっぼうではもちながらも、「麻原は本当に宗教体験をしたのか」という点に徹底的にこだわるという形で、オウム真理教をあるいはオウム真理教事件をとらえようとするのである。

なお、これまで出版されたオウム分析の圧倒的多数は、これら二つの方向のうち、前者すなわちオウム真理教を生み出した現代社会の捉え直しという方向をとっている。そしてその方向は、必然的に、日本社会の戦後50年の総括という形へと向かうことになる。だが、それぞれの著者が視野に入れているタイムスパンと、戦後50年の中での時代区分には、次に挙げる作品から分かるように、差異が認められるのである。

1. 宮台真司『終わりなき日常を生きる オウム完全克服マニュアル』筑摩書房、1995年7月。
2. 舛添要一『戦後日本の幻影「オウム真理教」 彼らはどこから来て、どこへ行くのか!?!』現代書林、1995年8月。
3. 小浜逸郎『オウムと全共闘』草思社、1995年12月。
4. 大澤真幸『虚構の時代の果て オウムと世界最終戦争』(ちくま新書73)筑摩書房、1996年。

このうち、時代認識も分析も一番荒っぽいのが2である。すなわち、戦後50年を戦後民主主義としてひとくくりにして、オウムをその戦後民主主義が生んだ毒蛇としてとらえるのである。そのため、提示されている処方箋も、父権の復興、コミュニティーの復興、縦社会の復興等、別段オウム真理教事件を素材としなくとも、酒鬼薔薇事件でも、17歳がきれるという事件でも、どれを素材としてもあてはまってしまうようなものとなっている。オウム真理教事件をだしに日頃の主張を述べるというタイプの典型だと言えるだろう。

一方、その視野のタイムスパンが最も短いのが1で、80年代から90年代前半という15年間の社会変化のなかで、オウム真理教事件が論じられている。すなわち、80年代前半の



『うる星やつら』という漫画に代表されるような、女の子を中心とした「終わらない日常」という終末観から、その「終わらない日常」に耐えきれない男の子たちの輝かしき「核戦争後の共同体」という終末観（たとえば『AKIRA』や『風の谷のナウシカ』という漫画に代表される）を経て、輝かしさなどありえない「終わりなき日常」のなかで「まったりと生きる」ことを受け入れた90年代前半の女の子たちの終末観（たとえばブルセラ少女に代表される）への変遷の中で、オウム真理教事件をとらえようとするのである。そして、今の時代、輝かしさなんかあり得ないのだから、男の子も「まったり」生きていこうよ、というのがオウム信者（あるいは潜在的オウム信者）たちへのメッセージである。

また、戦後50年を、戦後から高度成長期の「理想の時代」と、1973年の連合赤軍事件以降の「夢の時代」と、1970年代後半以降の情報化され記号化された疑似現実の社会（情報社会・脱産業社会・消費社会）の「虚構の時代」との三つに区分し、現代を「虚構の時代」としてとらえる4も、「理想」などというような「輝かしきもの」が成り立ち得ない社会として現代社会をとらえているという点で、その現代認識は1と類似したものだと言える。そしてそのような時代認識のもとに、オウム真理教事件を、虚構の現実化（つまり、現代においては、虚構を理想として保持するには、現実のほうを虚構にあわせて破壊するほかない）としてとらえるのである。

他方、3は、戦後50年の二つの節目が、連合赤軍事件とオウム真理教事件であったのだととらえている。すなわち、高度成長が生み出した矛盾に対する社会改革運動の末路が、連合赤軍事件であり、一方、その後の豊かな社会における自己変革運動（すなわち、自分が変われば世界も変わるとする運動）の末路が、オウム真理教事件であったととらえるのである。

そして、このようなタイムスパンと時代認識の差（つまり、オウム真理教あるいはオウム真理教事件を、戦後50年の中でとらえるのか、それとも、70年代後半から80年代以降に特有の現象ととらえるのかという力点の差）はさらに、次のように、オウムを60年代末から70年代はじめの全共闘運動や連合赤軍事件との関わりでとらえようとするのか、それとも、80年代以降のサブカルチャーとの関わりでとらえようとするのかという差となっても現れている。

#### 2.4.1. オウムと全共闘あるいは連合赤軍

そのうちまず、オウムを全共闘運動や連合赤軍事件との関わりでとらえようとしたのが、次のような作品である。

1. 小浜逸郎『オウムと全共闘』草思社、1995年。
2. パトリシア・スタインホフ / 伊東良徳『連合赤軍とオウム真理教 日本社会を語る』彩流社、1996年。

このうち、1はすでに紹介した。また2に関しては、内容的に見るべきものはない。

### 2.4.2. オウムとサブカルチャー

一方、オウムをサブカルチャーとの関わりでとらえようとしたのが、次のような作品である。

1. 大塚英志『「彼女たち」の連合赤軍 サブカルチャーと戦後民主主義』文藝春秋、1996年。
2. ブランク編『ジ・オウム サブカルチャーとオウム真理教』太田出版、1995年。

だが内容的には、2に収められた大澤真幸「終末という理想」(これが後に『虚構の時代の果て』へとつながる)以外には、見るべきものはない。

## 0.3 3. これまでの発言と研究(2) 分野別分類

ここで次に、観点を变えて、オウム真理教あるいはオウム真理教事件に関する発言および研究を、学問分野を中心とする分野別に分類して、見ていくことにしたい。そうすることでさらに、これまでの発言や研究のなかで、何があるいはどこが欠落していたかという点が、よりはっきりと見えてくることとなるだろう。

### 0.3.1 3.1. 宗教学

まず、オウムに関して最も積極的に発言を行ってきたのが、宗教学であった。そしてその関心のあり方は、当然のことながら、「オウム真理教とは何か」という、宗教的次元に属するものが中心であった。その代表的なものに、次のような作品がある。

1. 島園進・石井研士編『消費される「宗教」』春秋社、1996年。
2. 阿部美哉『現代宗教の反近代性 カルトと原理主義』玉川大学出版会、1996年。
3. 『宗教と社会(別冊) 1996年度ワークショップ報告書』「宗教と社会」学会、1997年。
4. 島田裕巳『宗教の時代とは何だったのか』講談社、1997年。
5. 島園進『現代宗教の可能性 オウム真理教と暴力』(叢書現代の宗教2)岩波書店、1997年。

このうち特に注目に値するのが、2と5である。まず2は、オウム真理教自体を中心に扱ったものではないが、ともに暴力と結びつくことが多いカルトと宗教原理主義をともに、その反近代性という共通項で論じたものである。すでに述べたように、「日本の戦後50年のなかでのオウム」という、日本ではどちらと言えれば内向きな形で論じられることの多い

オウム問題が、実はもっとグローバルな観点からも論じられるべきものであることを示唆している点で、この作品は意義のあるものだと思われる。

一方、5は、欧米では終末論との関連で論じられることが多いオウム真理教に関して、麻原的タントリズムの思想的帰結としてその暴力性を解明しようとしたものである。この作品もまた、ある意味では2と逆方向にはあるが、オウム真理教に関する新たな理解を提示したものとして、意義のあるものであろう。

### 0.3.2 3.2. 社会学

次に発言が活発だったのは、おそらく社会学であろう。そしてその関心のあり方は、どちらかと言えば宗教学とは逆方向（もちろん両者が重なる局面も多いのだが）で、オウム真理教あるいはオウム真理教事件を生み出した現代社会の捉え直しという方向に、力点が置かれている。その代表的なものには、次のような作品がある。

1. 宮台真司『終わりなき日常を生きる オウム完全克服マニュアル』筑摩書房、1995年7月。
2. 大澤真幸『虚構の時代の果て オウムと世界最終戦争』（ちくま新書 73）筑摩書房、1996年。
3. 瀬田川昌裕『日本社会の病理とオウム真理教 カルト集団にかんする記号論的考察』白順社、1997年。

1、2はすでに紹介した。3は、生きる意味を喪失した現代社会における、オウム真理教教団の構造と日本社会の構造とを、聖と俗を縦軸にエロスとタナトスを横軸にして、パラレルなものとしてとらえたものである。

### 0.3.3 3.3. 左翼

ソ連崩壊以降の現在では、マルキシズムや左翼の影が非常に薄くなってきてしまっているが、このオウム真理教事件に関しては、左翼の側からの発言も活発であった。ただ、同じ左翼とは言っても、その中味は多様なので、ここでは便宜上、旧左翼系と新左翼系と全共闘系という区分に従うこととする。そして、そのそれぞれの発言は、以下の作品の中に収められている。

1. エスエル出版会編集部編『オウム大論争 地上の楽園か、現実の地獄か!?!』エスエル出版会、1995年。
2. 吉本隆明・プロジェクト猪著『尊師麻原は我が弟子にあらず オウム・サリン事件の深層をえぐる』徳間書店、1995年。
3. 亀山純生 [ほか] 編『離脱願望 唯物論で読むオウムの物語』労働旬報社、1996年。

このうちまず3が、旧左翼系つまりマルキシズムの唯物論の立場からオウム真理教の分析を行った作品である。すなわち、オウム真理教を、企業的大衆社会からの離脱としてとらえるのである。だが、唯物論の立場に立っているせいか、現代という時代や社会の分析が、上記の社会学者たちの分析と比べると荒っぽいという感は免れない。しかしその一方で、社会学者の分析の中には未来への希望が見いだせないのとは対照的に、未来への希望(たとえば新たな共同性への希望など)を見いだそうとしているところには、ホッとさせられるところがある。

次に1は新左翼系のもので、2は全共闘系のものであるが、内容的にはともに見るべきものはない。たとえば、1のなかで、むかし連合赤軍の議長だった塩見孝也が、オウムを主観的観念論の典型的唯我論・ネオファシズムととらえ、他方、江川紹子等を旧左翼のブルジョワ民主主義による「オウム＝ファシズム論」派ととらえ、またオウム事件での警察権力のあり方のほうのみファッショとして批判しているが、このような彼の提示する図式は、すでに化石化しているのだとしか私には考えられない。さらに、この種の化石化は、1-3いずれのなかにも、何系かを問わず、多かれ少なかれ認められるものである。

#### 0.3.4 3.4. 宗教関係者

次に、宗教関係者からの発言には、次のようなものがある。

1. 桐山靖雄『オウム真理教と阿含宗』平河出版社、1995年。
2. 大川隆法『人生成功の秘策 宗教のパラダイム・シフト』幸福の科学出版、1995年。
3. 小松賢壽『麻原地獄の思想』桜書房、1996年。
4. 堀口慈恵『仏教の原点を問う オウムと宗教法人法をめぐる』中外日報社、1996年。
5. 竹内清治『オウム教義の批判と克服』光言社、1997年。

これらはいずれも、宗派性の明確なものばかりで、1 = 阿含宗、2 = 幸福の科学、3 = 真言宗、4 = 創価学会、5 = 統一協会である。そしてこのなかでは、3が注目に値する。というのは、オウムに関するこれまでの宗教界からの対応の特徴の一つとして、既成仏教側からの発言がほとんどないという状況があるからである。

さてこの3は、真言宗の僧侶が、大乘仏教の立場に立ちながら、脱会したオウムの幹部と仏教教義論争を行い、オウムの仏教教義の誤りを正すことで、この幹部のマインドコントロールを解いていくという、ある種のドキュメンタリーである。最終的には、この僧が、「私こそが最終解脱者なのだ」という形で、この幹部の前に立ち現れることで、マインドコントロールが完全に解けるという場面には、うさんくささと別のマインドコントロールに置き換えただけではないかという危険性が認められるものの、既成仏教側からのこの種の対応がほとんど全く認められないという現状では、貴重な試みとして評価しうるものであろう。

### 0.3.5 3.5. その他

その他、オウム問題に関して発言が期待される分野としては、哲学と仏教学とが考えられる。だが、少なくとも単行本に限れば、まず哲学の分野からのものは、以下に挙げる2のみである。一方、仏教学の分野からは全く発言が認められない。山崎哲をはじめ、オウム真理教の仏教的側面に関しては、仏教理解の不足に基づく的はずれな発言が多だけに、仏教学側からの発言が期待されるところなのだが、残念なところである。だがこの現象は、梅原猛や上山春平の世代以降、仏教が現代にも有効な思想として知識人に取り上げられることはほとんどなかった、ということの裏返しなのかもしれない。いずれにせよ、上記の4.1-4.4以外の「その他」として私に取り上げたいのは、以下の三冊である。

1. 吉本隆明・芹沢俊介『宗教の最後の姿 オウム事件の解決』春秋社、1996年。
2. 大塚賢司『オウム真理教事件を哲学する 高校倫理教育の現場から』地歴社、1997年。
3. 竹岡俊樹『「オウム真理教事件」完全解説』勉誠出版、1999年。

このうち1は、親鸞の造悪論との関連でオウム真理教の引き起こした悪（サリン事件）をとらえたものである。次に、2は、オウムを現代のニヒリズムの帰結としてとらえたもの（すなわち、オウムを自分が変われば世界が変わるという形での一発逆転を目指したものととらえる）で、このようなニヒリズム克服の道として、共同性とリアリティーの回復の必要性を説いている。最後に3は、考古学という現代の問題を考えるには異質とも思える分野からの発言だが、考古学的な文化分析の方法を用いて、現代における「神の位相」の出現としてオウムをとらえようとしたものである。すなわちオウムを、天皇制と類似のものとしてとらえようとするのである。

## 0.4 4. 処方箋 有効なのか？

以上、オウム真理教あるいはオウム真理教事件に関する発言あるいは研究を、取り上げる作品の多少の重複は覚悟の上で、テーマ別と分野別とに分けて整理してみた。その結果まず気づくのは、オウム真理教の元信者の手記にせよ、各テーマや分野別に分類した作品の著者たちにしろ、きわめて多く者たちが共有している現代という時代や社会についての認識が、「人生の虚しさ」「自己の存在の無意味さ」「ニヒリズム」等、その表現は異なるものの、現代および現代日本の社会は、「生の意味」の見いだしにくい時代および社会であり、だからと言って、「生の意味」見いだせるような時代や社会へと変えていける可能性がそう見いだせるわけでもないという、とても暗いものだという点である。だが、にもかかわらず、論者たちは、そのような社会から離脱したり超越したりしようとはせずに、社会の側にとどまるべきだと主張するのである。では、どうすればそんなことが可能なだろうか。この点に関して、彼らが提示する処方箋は、次の三つに分けられるだろう。

### 0.4.1 4.1. 自分の頭で考える

そのうちのまず一つは、「たとえ孤独でも、自分の頭で考え続けることを放棄してはならないのだ」というものである。そのような処方箋を提示しているのが、以下の三冊である。

1. 橋本治『宗教なんかこわくない』マドラ出版、1995年。
2. 森岡正博『宗教なき時代を生きるために』法蔵館、1996年。
3. 大塚賢司『オウム真理教事件を哲学する 高校倫理教育の現場から』地歴社、1997年。

このうちまず1は、宗教を過去のものとして、そのイデオロギー性を指摘し、宗教という呪術の園から解放されて、理性を持った普通の人になるべきことを説いたものである。次に2は、自己を他人に売り渡さず、自分の頭で考えることを説いたもので、自らの若いときの体験に基づきながら、オウム信者あるいは潜在的なオウム信者たちに熱いメッセージを送っている。最後に3は、オウム真理教事件を題材に、高校生たちに、自分の頭で考えるということを実践させた記録である。

だが、オウム真理教の元信者たちの手記を読むと、彼らは、社会にやすやすと適応した（もちろんいろんな悩みはかかえながらだろうが）圧倒的多くの社会の側に立つ人たちと比べれば、むしろ人生の意味について自分の頭でよく考えており、だからこそ、オウム真理教に入信してしまったということが認められる。もちろん、「自分の頭で考え続けるべきだ」というこの主張は、オウム真理教入信以降、自分の頭で考えることを放棄してしまったから駄目なのだという意味では理解できるのだが、入信以前に彼らが「自分の頭で考えていた」とことと、ここで著者たちが主張している「自分の頭で考えること」との差がどこにあるのかが、残念ながら私には十分には見えてこないのである。すなわち言い換えれば、「自分の頭で考える」というのはどういうことなのかが、これらの三冊の本を読んでも、どうもよく分からないのである（もちろんそれは、私自身が「自分の頭で考えていないからだということになるのかもしれないのだが」）。

### 0.4.2 4.2. 輝きあるいは超越は諦める

第二は、「輝きあるいは超越は諦めて、こちらがわの相対的な世界（つまり市民社会など）にとどまるべきだ」というものである。そして、そのような処方箋を提示しているのが、以下の二冊（なかでも特に1）である。

1. 宮台真司『終わりなき日常を生きる オウム完全克服マニュアル』筑摩書房、1995年7月。
2. 大澤真幸『虚構の時代の果て オウムと世界最終戦争』（ちくま新書 73）筑摩書房、1996年。

だが、たとえ現代が、「終わりなき日常」の続く「虚構の時代」だとしても（だが本当にそれは、変わり得ないものなのだろうか？）、「理想」や「超越」や「共同性」といった輝きを諦めて、1が説くように「まったり生きる」というニヒルな生き方をすることは、誰にでもできるものとは思えないし、また、そうする必要があるとも思えない。さらに言えば、そんな生き方ができないからこそ、多くの若者がオウム真理教にからめとられていったではなかったのだろうか。従って私には、この種の処方箋が有効であるとはとても思えないのである。

#### 0.4.3 4.3. 日本の社会や文化のあり方を変える

第三は、生に意味の見だしにくい現代日本の社会や文化のあり方のほうを変えていくべきだとする主張である。そのような処方箋を提示しているのが、以下の三冊をはじめとする数多くの作品である。

1. 亀山純生 [ほか] 編『離脱願望 唯物論で読むオウムの物語』労働旬報社、1996年。
2. 瀬田川昌裕『日本社会の病理とオウム真理教 カルト集団にかんする記号論的考察』白順社、1997年。
3. 竹岡俊樹『「オウム真理教事件」完全解説』勉誠出版、1999年。

このうち一例として、たとえば、3を取り上げれば、それは、経済原理から切り離された新しい文化システムの構築の必要性、すなわち、「仁」や「徳」に変わる新しいアナログ的な社会的価値の体系の創出の必要性を説いている。だが、たとえそうすることが必要だとしても、具体的にはどうすれば、この現在の日本の社会や文化がそんなふうに変わるというのだろうか。その具体的な手だては、どの作品にも見いだすことはできないのである。

### 0.5 5. おわりに 二つの欠落

最後に、これまで整理してきたオウムに関する発言および研究をもとに、何があるいはどこが、これまであまり論じられることがなかったのかという点について、私になりまゝとめておくことにしたい。私が気づいたあるいは気になった欠落は、次の二点である。

1. オウム真理教事件を生んだ現代日本社会に関する発言や分析に比べると、オウム真理教の宗教的側面、なかでも特にその教義と神秘体験に関する分析が不足している。
2. オウム真理教あるいはオウム真理教事件が、「日本の戦後50年のなかでのオウム」という内向きな形で論じられることが多く、そのため、阿部美哉『現代宗教の反近代性 カルトと原理主義』に見られるような視点、すなわち、カルトと宗教原理主義の持つ反近代性と暴力性というグローバルな視野からオウムを論じているものが、ほとんど認められない。

### 0.5.1 6.1. オウム教の教義と神秘体験

このうち前者に関しては、単行本として出版されているのは、島蘭進『現代宗教の可能性 オウム真理教と暴力』だけだが、雑誌論文も視野に入れると、以下のようにいくつかの論考が存在する。

1. 橋爪大三郎「オウム真理教はなぜ最終戦争を覚悟したか」、朝日新聞社編『何がオウムを生み出したのか 17の論考』朝日新聞社、1995年8月、pp. 9-22。[終末論と仏教のミスマッチを指摘している。]
2. 永沢哲「わが隣人麻原彰晃 霊的实践における技術とポエシス」、中沢新一責任編集『オウム真理教の深層』(Imago 6巻9号)青土社、1995年8月、pp. 211-243。[麻原の瞑想体験を評価しつつ、その階段のおかしさを指摘している。]
3. 中沢新一「「尊師」のニヒリズム」、中沢新一責任編集『オウム真理教の深層』(Imago 6巻9号)青土社、1995年8月、pp. 254-277。[麻原的タントリズムにおけるマンダラの欠落の意味について論じている。]
4. 定方晟×宮崎哲哉「対論仏教正統論 オウム真理教事件をめぐって」『望星』1995年8-9月号(東海教育研究所)。[仏教にとって正統とは何かという問題を扱っている。]
5. 宮坂宥勝「オウム真理教とは何か」『オウム真理教事件 宗教者・科学者・哲学者からの発言』(仏教別冊8)法蔵館、1996年1月、pp. 10-42。[小乗から大乘を経て金剛乗(内容的にはヒンドゥー・タントリズム)へというオウム真理教の教義の奇妙さについて指摘している。]
6. 高島淳「タントリズムとしてのオウム真理教」『宗教と社会(別冊) 1996年度ワークショップ報告書』、1997年3月、pp. 72-78。[麻原の説くシャクティパットが曲解に基づくものであることを明らかにしている。]

このように並べてみると、必ずしも少なくはないという気もするが、オウム真理教が持つ魅力の根幹に、はじめにで取り上げた石井久子が記したような神秘体験があるのだとすれば、また、田村智・小松賢寿『麻原おっさん地獄』に述べられているように、オウム真理教の仏教としての教義のおかしさを明らかにすることが、マインドコントロールを説くのに有効なのだとすれば、これまで全く発言を行ってこなかった既成仏教や仏教学の側からの分析が、もっとあっていいのではないのかと思えるのである。

### 0.5.2 6.2. カルトと宗教原理主義

次に後者に関しては、雑誌論文をも視野に入れても、越智道雄「オウム真理教と人民寺院」『オウムという悪夢』(別冊宝島229)1995年8月、pp. 72-83以外には、これまで、まとまった論考は見あたらないように思える。ただし、この論考も、カルトという視点で、



オウム真理教をグローバルな形で論じたものであり、宗教原理主義をも視野に入れた形でオウムを論じたものは、いまだ存在しないのである。従ってこの点は、今後の重要な課題となるだろう。

### 0.5.3 付記

この研究ノートは、2000年7月8日に北陸宗教文化学会第7回学術大会で発表したものに基いている。そこでの発表において、上記のような二つの欠落について指摘したのちに、欠落1のうちのカルトに関する欠落を補うものとして、ロバート・J・リフトン『終末と救済の幻想』(渡辺学訳)岩波書店、2000年が、また、欠落2を補うものとして、宮内勝典『善悪の彼岸へ』集英社、2000年が出版されたことを付け加えておきたい。

「研究ノート：オウム真理教の捉え方」『北陸宗教文化』13、2001.03、pp.305-327。